

堤中納言物語伝本考 (三)

松 村 誠 一

(高知大学文理学部 国語学国文学研究室)

On the variants of "Tsutsumi-chûnagon monogatari" (3)

Seiichi MATSUMURA

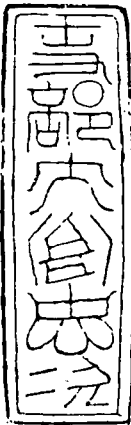
(Seminar of the Japanese Language, Liberal Arts Faculty, Kôchi University)

第二群第二類の諸本 (追加)

前回*, 追記において言及したのみの下記寫本を追加する。

(8) 池田亀鑑博士藏黒川眞頼舊藏本 (以下黒川本と称す。)

縦 27.1 糎, 横 20.1 糎, 袋綴二冊。「黒川眞頼藏書」「黒川眞道藏書」の藏書印の外に、「吏部大卿忠次」と読まれる印がある。(図版参照)



寛政重修諸家譜によれば、榊原忠次 (1605—1665) が、元和 2 年正月朔日 (1616) に式部大輔となり、寛文 3 年 3 月 12 日 (1663) に侍従となつていたので、彼の舊藏であつたものと考えられる。清水泰氏の「堤中納言物語詳解」** には、中田剛直氏の援助によつたとして「榊原忠次侯舊藏本」を掲げてある。その解説の記述によれば、ここに述べる寫本と極めて類似していることがわかり、或いは同一の寫本かと思われるが、所藏者が示されていないし「刑部卿忠次」の藏書印があるという点が異なっている。

奥書その他の記載はないが、江戸時代初期の書寫であろうと考えられる。

本書の本文を精査してみると、前回に掲げた第二類諸本の共通異文を、すべて持っている。また、「はなたの女御」の、「世の中の」の歌の「こはひにものは」の傍に「に歟本不分明イ」と記されていることも共通する。

これで本書が第二類に属することは明かである。

さらに、本書は前回に述べた上野図書館本と島原本との共通異文をすべて持っている。上野図書館本は、前にも述べたように「むしめつる姫君」「おもはぬかたにとまりする少將」の二篇が第一群第一類第一種の本文による補寫であるから、島原本との比較にはこの部分を省略して考察を進めたが、今、この部分について、黒川本と島原本とを比較すると、次の如き共通異文が存することを知るのである。異文の箇所は、下に一線を施して示し、頁数・行数は拙著堤中納言物語 (日本古典全書***) による。例文は黒川本で代表させる。

* 松村誠一 堤中納言物語傳本考 (⇒) 高知大学学術研究報告 第 3 卷 第 20 号 昭和 29 年 12 月

** 清水 泰 堤中納言物語詳解 要書房 昭和 29 年 6 月

*** 松村誠一 堤中納言物語 朝日新聞社 昭和 26 年 12 月

番 号	共 通 異 文	頁	行
1	かはむしくさきよせも見るかな	48	5
2	あせやかにすゝしけにみえたり	51	12
3	かはむしのゝしりてむらひをとさせ給	52	11
4	よすかおはする人などの給も	76	14
5	あね君もきゝて	77	4

これらの異文は、もし上野図書館本が補寫でなかつたならば、おそらく共通に持っていたであろうと思われる。

以上の諸点から、本書は第二群第二類に属し、その中でも上野図書館本・島原本と特に近い関係にあることがわかる。

前回に述べた第二類諸本の共通異文においても、上野図書館本の補寫の部分は除外してあるが、この部分についても、黒川本は、他の第二類諸本、即ち島原本・元祿本・京大国文学研究室本・広島大学本・豊陵部本との間に、次の如き共通異文を持っている。これらも、もし上野図書館本のこの部分が補寫でなかつたならば、おそらく共通に所有していたと考えられ、これらをもあわせて、第二類の共通異文と考えてよいであろう。このことは黒川本の調査によつて明かになつたところである。

番 号	共 通 異 文	頁	行
1	きぬとて人 ^レ のきるも	47	11
2	てふといふと云人ありなむやは	48	11
3	としのつもりけるほとも	74	2
4	御ふみなと侍らねは	79	1
5	心くるしけに ^レ しませて	79	7
6	御こゝろのうちとのみそ	82	5

第一群第一類第一種の諸本

(1) 東京大学附屬図書館蔵南葵文庫舊藏本（以下南葵文庫本と称す。）

縦 27 匁，横 19.4 匁，袋綴一冊。「南葵文庫」「やすむろ」「東淵文庫」等の蔵書印がある。

(2) 国立国会図書館支部静嘉堂文庫蔵松井簡治博士舊藏函崎文庫本（以下函崎文庫本と称す。）

縦 25.5 匁，横 18.2 匁，袋綴一冊。「松井藏書」「函崎文庫」等の蔵書印がある。

(3) 東北大学附屬図書館蔵狩野文庫本（以下狩野文庫本と称す。）

縦 23.7 匁，横 16.4 匁，袋綴二冊。「狩野氏図書記」「荒井泰治氏ノ寄附金ヲ以テ購入セル文学博士狩野亨吉氏舊藏書」等の蔵書印がある。

第一類第一種の諸本の共通異文

南葵文庫本・函崎文庫本・狩野文庫本を比較して、その共通異文をあげると、次の如くである。異文の箇所は、下に一線を施して示し、頁数・行数は拙著堤中納言物語（日本古典全書）* による。例文は南葵文庫本で代表させる。

* 松村誠一 堤中納言物語 朝日新聞社 昭和26年12月

番 号	共 通 異 文	頁	行
1	はる <u>く</u> けしきみありきて	39	10
2	そのまゝになんなられにし	42	12
3	そきあらぬけしきなり	44	13
4	かたつふりのつ <u>の</u>	49	4
5	さふらふなれとも	57	9
6	なに事をさせ給ふそ	60	5
7	つきなき御けしき	60	10
8	つきなきやなそ	66	6
9	四五 <u>かい</u> ふせくて	75	10
10	あせちの大納言の <u>もと</u> に	77	13
11	たゝにはあらずい <u>う</u> におほさるゝ	80	1
12	あちきなく	88	7
13	うれしく <u>思</u> いたらぬところなければ	88	13
14	しり給へる人あるは	90	14
15	いへにすゑたる人 <u>と</u> そ	91	11

(附記) 異文4・9・10・11は、前回*に述べた上野図書館本が、この第一種をもつて補写した部分であるから同本とも一致していることは勿論である。

第一種の諸本の相互関係

上述の如く、第一種の諸本は、共通異文を有するところから、同一の種に属するものと考えられるが、これら諸本の系譜上の関係を明かにすることはできない。ただ、南葵文庫本と函崎文庫本とは次に掲げるような共通異文を有するが、狩野文庫本はこれらを有しないという事実が、これら三本の親疎の関係を示していると考えることができる。

南葵文庫本・函崎文庫本共通異文

番 号	共 通 異 文	頁	行
1	うきすきたる雲の <u>す</u> そ	36	8
2	おはうへ	39	5
3	しはし <u>る</u> 給	41	9
4	袖をおしあて <u>い</u> みしう	44	11
5	とり <u>い</u> てみせ給へり	47	11
6	ものいみとも <u>つけ</u> さうして	55	3
7	やうたいなとも <u>い</u> てをかしけなるを	55	7
8	こゝろのみたれに <u>あら</u> む	58	13
9	くるまさしよ <u>せ</u> なと	59	8
10	しのゝめより <u>い</u> りて	61	9
11	おき <u>ない</u> たういとみ給ひそ	61	11
12	これ <u>な</u> そもとめえて待つれと	70	4
13	いみしく <u>め</u> はれけなるに	83	6
14	はちすのわたり <u>こ</u> の御かたちも	85	13

* 松村誠一 堤中納言物語傳本考(三) 高知大学学術研究報告 第3巻 第20号 昭和29年12月

番 号	共 通 異 文	頁	行
15	みやつかへにいたしたて殿はら	88	9
16	たれそやよを	89	4
17	きたにあしとたまへ	92	4
18	いてみえむもいとくくし	93	8
19	ここともとおはせられて	95	7
20	此女有きつきにしより	97	3
21	いつらいつきにそ	98	5
22	いとくしくもうとみ給かな	98	8
23	うらの水の	103	15

(附記) 異文 5 は上野図書館本に一致するが、これは該書が補写であるからである。

第一類第二種の諸本

(1) 無窮会図書館蔵清水浜臣舊藏本(以下浜臣舊藏本と称す。)

縦 27.6 ㎝, 横 19.7 ㎝, 袋綴一冊。「清水浜臣蔵書」「泊酒舎蔵」「井上頼圀蔵」「井上氏」「無窮会神習文庫」等の蔵書印がある。

68ウ左下隅に奥書がある。

(第1行) 文化三丙寅夏五月令書生某謄寫了

(第2行) 即日校一過聊註所見

(第3行) 同七年冬十二月書繡万笈堂 浜臣

(第4行) 有上木之企訪來請訂正因

(第5行) 再就考正焉

この奥書は浜臣の自筆と考えられるが、「浜臣」の署名の位置と、下に述べる他の浜臣本の奥書などから考えて、この浜臣舊藏本の奥書は、文化3年5月に、第1行・第2行および第3行の署名が書かれ、文化7年12月に、第3行(署名を除く)・第4行および第5行が書き加えられたものと考えられる。

「浜按」と標記した朱の註が加えられているが、これは奥書にみえる浜臣自筆の註である。

(2) 宮内庁書陵部蔵清水浜臣本(以下書陵部浜臣本と称す。)

書陵部に依頼し、東京カラーラボによつて撮影されたマイクロフィルムを使用した。このマイクロフィルムには「虫めづる姫君」に3コマ、「かひあはせ」に1コマ撮影もれがあるようであるが、再調の機を得ないので、そのまま使用した。

奥書は、前述の浜臣舊藏本の奥書の第1行・第2行および第3行の署名に相当するものがある。本文の行数・字詰も浜臣舊藏本と全く同じである。従つて、浜臣舊藏本を、文化3年5月以後、文化7年12月以前に書寫したか、或いはそれを転寫したものであると考えられるが、その何れであるかは明かでない。

(3) 無窮会図書館蔵井上頼圀舊藏本(以下井上本と称す。)

縦 27.3 ㎝, 横 19.7 ㎝, 袋綴一冊。「福田文庫」「待賢堂」「あしのや蔵書」「江戸四日市古今珍書会達摩屋五一」「井上頼圀蔵」「井上氏」「無窮会神習文庫」等の蔵書印がある。上述の浜臣舊藏本も井上頼圀舊藏本であるが、ここでは両本を区別するために、本書の方を井上頼圀舊藏本と称する。

奥書は無く、本文の行数・字詰は殆ど浜臣舊藏本と一致しているが、僅かな相違がある。

「浜按」と標記した朱の註がある。浜臣舊藏本の転寫本であろうが詳細は不明である。

(4) 国立国会図書館支部上野図書館蔵清水浜臣本(以下上野浜臣本と称す。)

縦27.3 糎, 横18.8 糎, 袋綴一冊。「岡本文庫」「榊原家藏」「故榊原芳莖納本」「東京図書館藏」等の蔵書印がある。

68ウに次の奥書がある。

- (第1行) 文化三丙寅夏五月令書生某謄
 (第2行) 寫了即日校一過聊註所見
 (第3行) 浜臣
 (第4行)(朱) 此本借清水光房藏書書寫了其後一校畢
 (第5行)(朱) 天保十一年正月 定良

ついで裏表紙の見返に

- (第1行)(藍) 此本謄寫之砌以莊内令女暉子藏本青錠一校返口
 (第2行)(藍) 於薦舍畢
 (第3行)(藍) 嘉永六癸亥*九月 吳竹舍主人

とある。清水泰氏**によれば、定良は木村定良、吳竹舍主人は日尾荊山であるという。

本書と類似の奥書を有するものに国立国会図書館支部静嘉堂文庫藏松井簡治博士舊藏日尾荊山本があるが、これは第一群第一類第二種と第二群第三類第二種との混態であることは、既に先年明かにしたところである***。

第一類第二種の諸本の共通異文

浜臣舊藏本・静嘉部浜臣本・井上本・上野浜臣本を比較して、その共通異文を調査すると、次の如くである。例文は浜臣舊藏本で代表させてある。

番 号	共 通 異 文	頁	行
1	ひとへにまかはぬへく	35	3
2	かく□□とそあらしとぞみゆ	38	9
3	たゝなはりたるに御くしのすそ	41	8
4	しはしたひて	43	14
5	こときあらぬけしきなり	44	13
6	とかむかたないててしか成	48	3
7	くちなはをまとけたり	49	15
8	いとめさましくむくつけき	50	6
9	うとましかるへきさまかなれと	53	5
10	きよけにきたかう	53	6
11	あやしきこいへはしとみ	55	1
12	さまかへにけり	56	8
13	おほさなれと	59	4
14	戀ちにしもおりたち給なん	60	15
15	ことわりかは	66	3
16	いとかくはおもひさりしを	70	8
17	ゆふきれにたちかくれて	72	8
18	いつならひにける	75	12

* 嘉永6年は癸丑である。

** 清水 泰 堤中納言物語詳解 要書房 昭和29年6月

*** 松村誠一 混態の処理について——日尾荊山旧藏堤中納言物語を中心に—— 國語と國文学 昭和16年9月

番 号	共 通 異 文	頁	行
19	き>おもふらんも心うく	77	6
20	女はしらぬはかりそ	80	4
21	まことにといきて	83	4
22	き>やうをよさせつ>	84	6
23	一ところにそおもひやる	88	7
24	いへにするたる人そ	91	11
25	おはしまさむするそと	95	14
26	ありそうみのうち	102	8
27	いそのかみあなる	103	1
28	若江のこほり	103	9
29	かふちかふと	103	9

(附記) 異文9・10・16は、沓陵部浜臣本のマイクロフィルムの欠けた個所であるが、かりに共通異文として掲げたので、他日の調査をまたなければならない。

第二種の諸本の相互関係

第二種の諸本の中でも、沓陵部浜臣本・井上本・上野浜臣本の三本の共通異文は、全篇にわたって多数に上つている。今それらを掲げることは紙幅の関係で許されないが、一々の共通異文についてみると、これら三本の共通異文の箇所が、浜臣舊藏本の本文の仮名の字体に、何らかの誤認され易い点を含んでいると思われるものが多い。次にそれらの中の幾つかの例を示す。凸版は浜臣舊藏本の字体であり、次に示すのが他の三本の共通異文、最後の頁数・行数は既述の拙著のそれである。(図版参照)

この事実を、これら三本が書寫の上で密接な関係を有することを示し、前に述べた奥書とあわせ考えれば、浜臣舊藏本が第二種の祖本であると推定してもよいであろう。しかし、他の三本が具体的にはどのような書寫の関係にあるかは明かにすることができない。

(附記) 本稿を草するに当り、池田亀鑑博士・東京大学附属図書館・国立国会図書館支部静嘉堂文庫・東北大学附属図書館・無窮会図書館・宮内庁沓陵部・国立国会図書館支部上野図書館から、閲覧或いはマイクロフィルム撮影の許可を與えられた。あつく謝意を表する。また郷土史家川村清之助氏・高知大学附属図書館目録係長矢野修二郎氏から有益な助言を頂いたことに感謝する。

(昭和30年9月30日受理)

浜臣舊藏本

三本共通異文

頁行

浜臣舊藏本

三本共通異文

頁行

わよ

のまたして

41
6

色たとに

色たとに

87
8

さきふる事

さきふる事

43
11

さく事す侍る

さく事す侍る

92
1

さきふる事

さきふる事

47
5

いつちやうすし

いつちやうすし

92
4

かたひのしらせて

かたひのしらせて

49
4

心くるしうとへと

心くるしうとへと

92
9

まなろし

まなろし

53
15

すまひとも

すまひとも

93
1

おのもしけなく

おのもしけなく

56
11

いめちもく

いめちもく

93
3

からみ申へき

からみ申へき

59
9

ちかきくらす

ちかきくらす

93
6

おなほめれと

おなほめれと

72
6

みむとそもひて

みむとそもひて

94
2

おなほめれと

おなほめれと

79
10

ひなひかり

ひなひかり

101
2

うごきにに給はす

うごきにに給はす

81
4

まう侍れと

まう侍れと

102
3

なけしきかな

なけしきかな

85
2

たらしに

たらしに

102
4

しけりましかし

しけりましかし

86
8

まろらかはら

まろらかはら

102
15

